阪神大震災（1995 年 3 月号掲載・渡海　正則）

須磨管内の建物火災より帰署し、受付勤務を交替し、約 30 分後の 5 時 46 分。ドドド・・・・・・という音とともに、座っていたイスの下から、床が突き上げられるように上下左右に揺れだした。受付のドアを開けに行こうとしたが、さらに揺れは激しくなり、身動きがとれなくなりイスに座っているのがやっとの状態であった。

揺れがおさまり、受付のドアを開けようとしたが、歪んで開かず、やむなく受付横のわずかに開いた窓よりガレージに脱出した。

5 時 47 分、ガス臭が辺りに立ち込めており、直ちにガスを遮断、全員で消防車両をガレージ外に押し出す。（署前に付近住民が続々と集まり出す）

5 時 50 分　署前で倒壊した木造アパートの 2 階部分より助けを求める声が・・・・・・最初の救助活動現場となった。2 階部分まで瓦礫の上を伝い子供を含む合計 4 名を抱きかかえで救出、さらに倒壊した 1 階部分に男性 1 名が生き埋めの状態になっており、消防隊も救出活動に加わり、瓦礫を排除し無事救出。（この間にも、かけ込み通報が殺到する）

6 時 30 分　そのアパート東隣りのマンションの 2 階、3 階でも要救助者数名を確認、3 連梯子を各階に架梯し、隊員 1 名が進入、要救助者にサバイバースリングを縛着し、かかえ救出により救出、7 時ごろまでに、このマンションの 3 ヵ所より計 10 名を無事救出（同様の事案が他で 2 件発

生、合計 3 名救出、また、このマンションでの救出活動中にも別件で出動、小隊は二分され 1 名を救出）

8 時 00 分　撤収作業中、付近住民より救助要請。木造アパートが倒壊し、数名が生き埋めになっているとの事。救助工作車より検索棒バールを持ち出し、小隊長以下 3 名で現場に向かう。

8 時 02 分　現場到着し、状況確認するとアパートの 2 階は、なんとか原型をとどめているものの 1 階は完全に倒壊し、地面からは、僅か 50 センチ位の高さになっていた。だが、その奥深くからは男女の声がかすかに聞こえた。生存者がいる・・・・・・励ましながら倒壊した 1 階部分からの声のする方向に瓦礫の除去を開始、バール、のこぎり等では、思うように作業ははかどらない、ましてや隊長以下 3 名では、現場付近に居合わせた男性 5 名に救出作業の協力を依頼、快く引き受けてくれた。

8 時 30 分　1 メートル掘り進むのに 10 分、いや 20 分はかかったであろうか、しかし、少しずつではあるが要救助者に近づいているはずだ。

進入方向確認のため、こちらから瓦礫の中へライトを照らすが、まだライトの光は、届かないようだ。やがて男性の元気な声がして、別の部屋では、やや取り乱した声で母親と娘が助けを求めている。二手に分かれて私は、母親と娘の救出にあたる。大きな柱が邪魔で進めず、のこぎりもなかなか歯がたたない。余震が気になる・・・・・・。

9 時 00 分　再びライトで瓦礫の中を照らす「見える！」と声がした。余震は気になるが作業に拍車がかかる。

9 時 20 分　僅か開いた穴の向こうに寄り添って座っている母娘がライトの光に照らし出された。幸運にも高さ 80 センチほどの空間が 2 人の命を守った。

「もう少しだ、がんばれ！」

9 時 30 分　ようやく約 30 センチ四方の開口部ができた。2 人ともケガはないようで娘の方から出てくるよう指示。狭い穴から抱きかかえて救出。作業に協力してくれていた男性らに手渡され、生田消防署まで搬送するよう指示。続いて母親も 9 時 40 分ごろ無事救出された。（作業に携わった全ての人から喜びの声が）

9 時 40 分　母親からの情報により隣室のおばあさんの検索を開始、再び先と同じ進入口より進入、さらに北側へ掘り進んだ。

10 時 00 分　かすかな声がした「息が苦しい！」ライトを照らしよく見るとタンスの下から足先が見える。ここだ！

10 時 20 分　タンスを動かすことは無理。バールで少しずつ破壊し除去。足元から引っぱり出し、10 時 30 分、3 人目を救出。（この間二手に別れて、男性の救出にあたっていた隊員が、コタツの下にいた 17 歳の男性を無事救出）

10 時 30 分　さらに次の情報では、一人暮らしのおじいさんがいるとの事。すぐさま同じ進入口より進入し、さらに南側へ進入、声の確認はとれるもののライトの光も届かず、埋まっている状態から見てここからの救出は無理と判断。

10 時 35 分　生き埋めになっていると思われる場所の直上（2 階）からの救出を試みる。2 階の部屋の畳・床をはがし、1 階の天井部分を破り、木片等を除去し、ようやく要救助者を発見、身体も挟まれている所もなく 10 時 45 分ごろ無事救出。

10 時 45 分　この地震で救助活動を開始し、私が始めて目にした死亡者を確認。先ほどの男性を救出した部屋の南隣りの部屋であった。そこでは母親の死が信じられず取り乱した状態の息子（30 歳くらい）が必死に我々に訴えた。

「助けてやってくれ」

状態を確認すると 1 階の部屋でベッドで眠っていた母親の下半身に柱状の角材等瓦礫がのっており、今日のこれまでの現場では最悪のものであった。死亡している旨、息子に話すが、納得してもらえず、少しでも生存の可能性が高い現場へ向かいたいという思いと、息子の悲痛な叫びに板ばさみとなり、しばし、その場から動けなかった。

10 時 50 分　救出作業開始、まずはベッドの足をのこぎりで切断。ベッドを低くして、ベッドと瓦礫の間に隙間を設けようとしたが、想像以上の圧迫を受けており、人力では救出不可能と判断。

10 時 55 分　救助器材を取りに、救助工作車に戻るが、器材は、ほとんど他の現場に持ち出されていた。署の救助器具倉庫から器材とガレージにあったガレージジャッキを現場に搬送。

11 時 00 分　狭い活動スペースで、辛うじてジャッキが設定された。「これで救出できる」とジャッキアップする手に力が入る。しかし、びくともしない。隊員全員に焦りの表情が・・・・・・。

13 時 40 分　ジャッキの設定場所を変え、同じ作業を何度となく繰り返した。重機がなくては無理だ。息子にもう一度、説得をしようとしたが、この時、すでに現場からは立ち去っていた。途方に暮れている間はない。自分の無力さを痛感し、後ろ髪を引かれる思いで次の現場に走った。